HORIKAWA MANDOLIN ORCHESTRA
47TH REGULAR CONCERT

指 揮
田中 彰　窪田 智優

1ST MANDOLIN
★後藤 文　窪田 智優　竹内 博之　安田 長次郎　井上 洋子　坂東 公子　藤壺 俊貴

2ND MANDOLIN
★藤村 秀夫　駒井 晴美　宮西 和代　岩田 徹　髙橋 和子　米田 直子
杉田 季代恵　多田 千恵子　小俣 みどり

MANDOLA
★前田 貴子　西村 弘枝　藤原 恭子　米田 富三　仲 孝文

MANDOLONCELLO
★多田 修　小川 政信　田中 彰　佐々木 亮一

GUITAR
★＊上家 香　日暮 正彦　梅戸 伸浩　大石 咲枝　森木 晋也　広田 高雄　田中 直美

BASS
★南村 佐保

司 会
山本 泰子

★…パートトップ
＊…コンサートミストレス

団長挨拶

皆様には堀川マンドリン合奏団第47回定期演奏会にご来場頂き、誠にありがとうございます。団員を代表して心より御礼申し上げます。

今回のプログラムは例年の2部から1ステージ増やして、3部構成としました。今日7月7日は七夕、一部の団員の強い要望で七夕をモチーフにした曲「The Seventh Night of July」(たなばた)を演目に加えております。

第1部は日本人作曲家の曲を中心に選びました。2曲共私どもとしては初めて取り組む曲です。第2部は、ソリストに八里 哲史さんをお迎えしてA.ヴィヴァルディの「四季」より「春」を演奏します。八里さんは現在マンドリン指導者として多忙を極められておられますが、私どもの願いを快く引き受けて下さいました。マンドリンの「春」をお楽しみください。第3部はマンドリンオリジナル曲 A・アマディ作曲「海の組曲」をメインとしました。この曲に対する指揮者の熱い思いが皆様に伝わることを願っております。

今日もメンバー全員、モットーである「メンタルハーモニー」を心に刻み演奏いたします、それが皆様とともに更なるハーモニーとなることを願っております。

初夏の午後のひと時、最後までお楽しみいただければ幸いです。

団長　日暮 正彦

次回告知	次回演奏会は、ウェブサイトでご案内いたします。 https://www16.atwiki.jp/horiman/ をご覧ください。

団員募集中

京阪本線 三条駅、京都市営地下鉄東西線 東山駅からほど近い、
東山いきいき市民活動センターで月2回ペースで練習しています。(演奏会前は、もう少し練習します)
〈連絡先〉 horikawa.mandolin@gmail.com

HORIKAWA MANDOLIN ORCHESTRA

47TH REGULAR CONCERT

2019.7.7 SUN
OPEN 13:30
START 14:00
@ KYOTO PREFECTURAL CENTER FOR ARTS&CULTURE

第Ⅰ部

指揮
窪田 智優

仮面舞踏会 …… A.ハチャトゥリアン／南村 佐保 編曲

マンドリン酒場の夜
Version2010 …… 湯淺 隆／吉田 剛士 編曲

コバルトブルーの奇跡
～旅立つ君へ～ …… 武藤 理恵

第Ⅱ部

指揮
田中　彰

協奏曲第1番ホ長調より「春」 …… A.L.ヴィヴァルディ
マンドリン ソロ　八里 哲史

第Ⅲ部

指揮
田中　彰

The Seventh Night of July
“TANABATA” …… 酒井 格／南村 佐保 編曲

交響曲第8番ト長調
作品88より第3楽章 …… A.ドヴォルザーク／藤田 興 編曲

海の組曲 …… A.アマデイ

1. ナイアード（水の妖精たち）のセレナーデ
2. オンディーヌ（水の精霊たち）の踊り
3. シレーヌ（女神）の歌
4. トリトン（海の神）のフーガ

曲目紹介

仮面舞踏会

ハチャトゥリアン(1903年～1978年)は、この曲をレールモントフの戯曲「仮面舞踏会」のための劇音楽として作曲、1941年に初演されました

この戯曲のあらすじを、かなり端折って書いてみますと“主人公の凄腕の賭博師アルベーニンは妻ニーナと賭博場で全財産を失いかけた若い公爵を助けるため、代わりに博打をして財産を奪い返す。後日、二人は仮面舞踏会に行き、そこでニーナは腕輪を失くしてしまう。その腕輪を男爵未亡人が拾い、あの博打で負けそうになった公爵が男爵未亡人を口説こうとするのを煙に巻くため(男爵未亡人が若い公爵へ拾ったニーナの)腕輪をあげてしまう。公爵は「口説いた女からのプレゼントだ」と、ニーナが失った腕輪を自慢げにアルベニーンに見せたことがきっかけで、アルベニーンは妻に不信感を抱き、ついには、(本日演奏する)このワルツで踊った後のニーナに毒入りアイスクリームをたべさせて殺してしまう。その後、毒殺現場を目撃した男から顛末を聞かされアルベーニンは発狂してしまう。この男はかつてアルベーニンに賭博で破れ破産した男であり、この男は偶然にも復讐に成功したのであった。”と、なんとも救いのないお話です。

本劇音楽は全14曲からなりますが、この中から5曲を選んで組曲としています。今日、演奏するワルツは組曲の1曲目です。

マンドリン酒場の夜

ポルトガルギターとマンドリンのユニット「マリオネット」の曲。作曲者の湯淺隆氏によると、「マンドリンの音色が流れ、仲間たちが集う、そんな酒場があったら…というイメージで」創られたそうです。

シンコペーションを際立たせた、キレのある軽快なシャッフルのリズムにのって、哀愁を帯びたメロディーが始まります。転調し、中間部はギターの刻むステップが、踊りだしたくなるような、かっこよさです。そして1stソロが粋に、またかきくどくように歌いあげます。再現部はドラ・チェロとマンドリンの掛け合いやマンドリンとギター伴奏の絡み合いが楽しく、心地よいメロディーにウキウキします。最後は素敵な大人の時間に乾杯♪というイメージでしょうか。奏者もお客様も楽しくなるような演奏を目指します。

コバルトブルーの奇跡

本曲はレヴァールマンドリンアンサンブル第15回記念定期演奏会で初演されました。

作曲者より初演にあたり次のように紹介されています。

『家族や友人・知人など、大切な人が新しい道を歩み始める時、黙って見守ることもあれば、そっと背中を押してあげることもあるでしょう。もしかしたらそれは一つの別れとなるかもしれません。旅立つ君へ…。これから出会う、楽しく幸せなことや悲しく辛いこと、それら全ての「奇跡」が、コバルトブルーのように鮮やかで深く美しい輝きを放つ、人生の彩りとなりますように！』

協奏曲第1番ホ長調より「春」

もう解説はいらない、クラシックを知らない人でも一度は聞いたことがある「ヴィヴァルディの春」。マンドリンソロは八里哲史です。八里氏は京都府立大学マンドリンクラブの出身で在学中の1980年に、日本マンドリン連盟の日本マンドリン独奏コンクールに入賞され、以降、今日まで日本を代表するマンドリン奏者、指導者として活躍されています。現在、マンドリンオーケストラ「アデュー」、マンドリンアンサンブル「プリマヴェーラ」を主宰。私たち堀川のOBであり、府大OBのひとりとしていわせてもらえば府大ギタマン（ギターマンドリンクラブ）の宝のようなかたです。本日は日暮団長のたっての願いで出演いただきます。ヴィヴァルディはイタリアのピエタ慈善院付属の音楽院で、身よりのない少女への音楽教育をおこないながら、600を超える曲を作曲（一曲を600回アレンジした、との悪口もありますが）しました。今回勉強して、新幹線もネットもAIもドローンもない時代(!?)の、自然と人への慈愛を感じることができたように思います。（田中 彰）

The Seventh Night of July

「1987年から88年にかけて書いた、私にとって初めての本格的な吹奏楽のための作品。当時、高校の吹奏楽部に所属していた私が親しんだ数多くの作品に影響を受けています。七夕は、天の川によって離ればなれにされてしまった若い男女、彦星と織姫が、年に一度7月7日の夜だけ逢う事を許されると言う伝説ですが、この作品の中間部ではその二人が再会する場面（Alto Saxophoneが織姫、Euphoniumが彦星）を描いています。私が生まれ育った枚方市は、七夕伝説との関わりが深く、星ヶ丘や星田、天の川、逢合橋（あいあいばし）や、かささぎ橋など、この伝説にちなんだ数多くの地名やスポットがあることも、この伝説を題材に作品を書いた事に大きく影響しているでしょう」とは作曲者のコメントです。府立香里丘高校のときに作曲されたこの曲は、アルトサックスやユーフォニウムとあるようにもとは吹奏楽の名曲です。昨年の藤掛廣幸氏の「星空のコンチェルト」に続き、今年も星空にちなんだ曲をお届けします。

南村佐保による編曲は、おそらくこれからもマンドリンで弾き継がれていくであろう、曲の魅力を余すことなく伝えるすばらしいアレンジとなっています。この南村版に今日、七夕にbirth（いのち）を吹き込みます！今宵晴れますように。（田中 彰）

交響曲第8番ト長調 作品88より第3楽章

こちらも昨年に続いてドヴォルザークを演奏します。昨年はスラブ舞曲で今年は交響曲の一楽章ですが、同じスラブ舞曲と言ってさしつかえない、哀愁に満ちたこれも人気の曲です。聞いていて気持ちのよい曲は得てして弾くのはムズカシイ！のですが、ゆったりと旋律に身を委ねていただけたら幸いです。中間部とコーダはドヴォルザークの他の作品からとったものらしく、私は今回初めて知りました。こうした作品の転用は実はよくみられることなのですが、ドヴォルザークにもあったとは…。ブラームスがメロディメーカーのドヴォルザークをして「彼がごみにしたメロディでも、私なら立派な作品に仕上げるのに」と羨んだとか（うそかまことか）。忙しかったのか、はたまたそのメロディが気に入っていて、また使いたかったのか（たぶん前者）、ドヴォルザークの人間味を垣間見たようで、わが身を振り返りマシタ（現在出版本の編集に忙殺中）。（田中 彰）

海の組曲

シンプルでいて豊かなイマジンを湛えたタイトルもそうですが、それぞれの楽章にはギリシャ神話などに基づく神や精霊にちなんだ、ロマンティックなタイトルがつけられています（意訳もふくめていろいろな標記があり、今回は私なりに解釈整理したものを掲載）。マンドリン音楽の美しさ、魅力を伝える曲は数あれど、この曲ほど率直に私たちにそれを届けてくれる曲はないでしょう。もとはマンドリン四重奏でかかれた、イタリアマンドリンオリジナルの代表的な作曲家による文句なしの名曲です。1909年マンドリン誌イル・プレットロ主催の作曲コンクールで第一位をとっています。

ゆたかに年輪を積み重ねて（もっと音を磨きましょう）人生の機微を周知した（表現の意識を高めましょう）デリカシーに満ち満ち溢れた（他のパートをちゃんと聞いて！）私たちの演奏をどうぞ！（田中 彰）